

法然仏教学研究センター 2019年度全体研究会

〈第1回〉

日 時：2019年4月22日（月）

参加者：17名

- ・センター長あいさつ
- ・各班進捗状況発表

〈第2回〉

日 時：2019年5月20日（月）

参加者：17名

- ・研究発表

発表者：明石寛成（当センター学術研究員）

テーマ：江戸時代における浄土教思想—懐音『浄土考原録』を通して—

要 旨：江戸期仏教の重要性はしばしば指摘されるが、未開拓の分野が多い。江戸時代中期の浄土宗僧侶である懐音の生涯や著作、および思想についても同じことが言える。懐音は持戒念仏に励み、大蔵経校訂で有名な法然院中興第二世の忍激に高く評価され、請われてその法統を継いだ。そのきっかけが、懐音『浄土考原録』の公刊である。大島泰信は『浄土宗史』において、「『浄土考原録』を見た忍激がその人となりには惹かれ、懐音を後継者にしようと同学の義山に謀った」と指摘している。義山もまた傑出した浄土宗僧侶である。以上のことから『浄土考原録』の重要性が自ずと証明されるのである。

しかし懐音の生涯についても、『浄土考原録』や『諸家念仏集』などの著作についても、先行研究がほとんどない。また同時期の、かれらを取り巻く寺院の動向についても研究が乏しい。そこで本発表ではこの著作から若干の章を取り上げ、その内容から当時の浄土宗および周囲の状況の一端を紹介した。

はじめに懐音の伝記、及び『浄土考原録』の書誌について整理した。そこで辞典では明らかになっていない、生年、出生地、住職歴、『浄土考原録』の成立について考察を加えた。生年は『法然院誌』に享年六十二歳とあることから生年を一六五三年と推察される。出生地は『玄阿伝略』

に「和州」とあることから「大和」の生まれであると考えられ、住職歴は輪番での住職歴を踏まえると二十二年務めたことが分かる。そして『浄土考原録』には『天和本』と『寛政本』の二本があり、『天和本』は懐音が、急ぎ記したものであるため誤字脱字の引用の誤りがあることから『寛政本』が作られたことが分かった。

そこで『浄土考原録』第一章「説法元旨」を取り上げ懐音の仏教観について考察した。はじめに仏には多くの教えがあり、釈尊の出世については『法然上人行状絵図』からも見出せた。そして江戸期に限らず多くの論争があるが、その全ての教えが釈尊の教えであり、方便として様々な方法を説いただけで、全ての教えが解脱に通じることは『観経疏』『選択集』にも見られた。浄土の優劣については方便であり、区別はないが、懐音は多くの衆生の縁に随ったとする。懐音の立場は「教門非一」「教法元無二」で表現され、通仏教による浄土教の視点を持つのである。その中でも白居易の引用は禅僧への非難を暗示していると考えられる。今後もこの点には注意して研究を進めていきたい。

・各班進捗状況発表

〈第3回〉

日時：2019年6月10日（月）

参加者：15名

・研究発表

発表者：兼岩和広（当センター嘱託研究員）

テーマ：選択集諸本の研究—藤堂祐範旧蔵本について—

要旨：近年発刊された『新纂浄土宗大辞典』の中「選択集の諸本」の項においては、その所在が未だに藤堂祐範旧蔵となっており、百年前の情報がそのまま明記されている現状を改めなければならない。そこで今般、京都信重院現住職 藤堂祐亨上人のご厚意により、信重院に所蔵されている藤堂祐範の時代より伝わる貴重書物の調査を許可して頂いた。この調査研究によっておよそ百年間停滞していた『選擇集』の書誌学的な研究が再起動される事となる。

そもそも藤堂祐範とは大正時代から昭和前期に活躍された浄土教書誌学の第一人者である。師の残された業績は現在においても一級資料として浄土宗学者並びに文献学研究者に用いられている。その代表といわれ

るのが浄土教古版本の研究であり、特に著書『選擇集大観』として纏められた選擇集諸本の書誌学的研究は浄土宗典籍研究には欠かせない研究である。その『選擇集大観』には『選擇集』の古鈔本類五種、粘葉綴古版本類一一種、袋綴本五三種、近代活字類一四種が解説されており、当時（大正時代）に流布していた『選擇集』を網羅している。

しかしながら、それ以降、『選擇集』の書誌学的研究はストップしたままである。その現状を打開すべく今般の研究目標としては、およそ百年前に藤堂祐範がまとめられた以上の情報を開示出来ればと考えている。現在、信重院に所蔵される『選擇集』文献は五十三種、百六冊に及ぶ。今回、その全てを調査させて頂くこととなる。

調査研究の内容としては、寸法や丁数といった書誌学的調査によって、新たな目録の作成を試み、さらには、デジタル機器による全資料全頁の撮影を行い、デジタル資料を作成して、将来的にはデジタルブックやデジタルアーカイブとして、現物を傷めること無く閲覧できる場を設けることが出来ればと考えている。

さらに、種々の大学図書館や寺院、個人蔵などにも範囲を広げ、『選擇集』全体の出版年表を作成し、現在の所在地などを明らかにすれば、『選擇集』の書誌学的研究に大いに役立つ成果を残すことが出来るであろう。また、諸本の資料が集まれば、それらの比較することで『選擇集』の校訂作業が行え、新たな『選擇集』テキストの作成も可能と考える。また諸本の紙面に記された、ルビや送り仮名等を解明すれば『選擇集』の明確な書き下し文が作成でき、さらに紙面に記された書き込みを解明すれば注釈書的な資料も作成することが可能で有ろう。

以上のような内容を「選擇集諸本研究班」として、法然仏教学研究センターの新たな部門の調査研究を始める。今後の研究成果に期待して頂きたい。

- ・各班進捗状況発表

〈第4回〉

日 時：2019年10月7日（月）

参加者：21名

- ・研究発表

発表者：一ノ瀬和夫（当センター学術研究員）

テーマ：法然浄土思想における仏性の位相

要旨：法然が、大乘仏教に通底する概念である「仏性」を、どのように認識していたのかを検討することで、法然浄土思想の意義と特色を明らかにすることを目的とした。具体的には、まず法然浄土思想の完成型である『選択本願念仏集』の直前に成立した『逆修説法』を検討対象として、そこでの口称念仏における名号と声の意味づけ、並びに念仏の修行としての位置づけを抽出し、いずれも絶対的な往生業とは必ずしも断定されていないことに注目した。そこで、上記の三要素が決定的要因とはされていない理由を検討し、結論として、法然が「仏性」を断念する方向に舵を切ったことがその根源にあった可能性を指摘した。

その結論を受けて次に、法然が「仏性」の断念に向かった理由を探るために、その遺文に現れる「仏性」という文言に注目し、それを網羅的に取り上げ、その文言の使われ方および文脈上の意味等の分析を試みた。その作業を通して、経論や法語といった法然の浄土思想に直接かかわる文書のなかでは、「仏性」という語の使用は極めて少ないが、あったとしてもそれは他宗の宗旨への言及、ないしは他の経論などからの引用といった範囲での使用に留まることを明らかにした。一方で、法然自身語りの中で言及される場合には、人間の資質や能力の劣化への自覚を示す文脈の中で使用されるというのがその特徴となっていることを指摘し、結果としてこの認識が、法然に「仏性」断念の方向を取らせることになっていたと結論づけた。さらにそれに加えて、善導を淵源とする指方立相という概念は、そもそも衆生の住まう娑婆世界と阿弥陀仏の極楽浄土を対極的に捉えるものである以上、必然的に仏が人間世界に遍満することを前提とする仏性思想とは相容れないものとなることも示し、そこから、「仏性」を断念した法然の浄土思想は、二元論的世界観を前提とするものとなることを確認した。

以上を受けて、仏性・如来蔵を断念したなかでの仏凡の関係について、衆生としては、二元論的な世界に分離した状態にある自己と仏を繋ぐ回路をまずは確立しなくては信仰は確立しないことに先ず言及した。そしてその状況のなかで、仏との回路となるのが衆生にとっては口称念仏であり、口称念仏の有効性を保証し、それが衆生と阿弥陀仏とを繋ぐ回路となることを仏側から提示するものが、善導が取り上げた三縁、特に親縁という概念であった、と法然は捉えていた可能性がある」と結論づけた。

・各班進捗状況発表

〈第5回〉

日 時：2019年11月11日（月）

参加者：12名

・研究発表

発表者：武田真享（当センター嘱託研究員）

テーマ：聖聡『厭穢欣浄集』の翻刻と関連文献の整理

要 旨：浄土宗第八祖であり、増上寺の開山としても知られる大蓮社西誉聖聡（一三六六一—一四四〇）は、七祖西蓮社了誉聖罔（一三四一—一四二〇）が作り上げた、浄土宗独自の伝法である「五重相伝」の制度を継承し発展させたと同時に、大変多くの著述を遺したことで知られている。その中でも『厭穢欣浄集』は、師である聖罔が寂した直後という、聖聡教学を窺い知る上で重要な時期に執筆されている。しかし、先行研究も限られており『浄土宗全書』等にも収録されていないことから、今回翻刻作業を行った。

『厭穢欣浄集』は聖聡が、念仏往生の安心、中でも総安心である「厭離穢土欣求浄土」を、初学者に理解しやすく、因縁、比喻を加えて著した書であるが、その引用文献の多くは、当時広く読まれていたであろう伝記や説話集、和歌集といった文学書が用いられている。師である聖罔は、文学、神道、和歌にまで精通していたとされるが、聖聡も例外ではなかったものと考えられる。今回の発表では、「厭離穢土」の中、興味深い説示の多かった「人道」の解説箇所を示しながら、引用文献等の整理を行ったが、仏教書以外に、『古事談』、『白氏文集』、『林間録』、『蒙求』等からの引用がみられた。中でも、同じく『往生要集』からの影響を受けて著された『宝物集』からの引用が最も多くみられた。また、王昭君の故事の引用例の検討から、聖聡が『宇津保物語』を読んでいたであろうことを指摘した。

また、聖聡の三部作と言われる『大経直談要註記』、『小経直談要註記』、『當麻曼陀羅疏』の中に用いられる因縁や比喻が、本書の中にも多くみられたことも、聖聡教学を知る上で重要であるといえる。今回は本書の翻刻作業と引用文献の報告にとどまったが、以降、これら三部作への反映についても体系的に捉えていきたい。

そして、本書は「念仏往生の安心を記した書」であるとはいえ、「老苦」

の最後には『往生礼讃』の「各聞強健有力時」の句を用い、「死苦」の最後には『大智度論』に述べられるような平生の重要性を説く等、各章段の末尾には、起行への含みをもたせていた。本書の結びでは、起行と作業について言及したのち、「但し三心四修五念、皆南無阿弥陀佛なる口傳あり。くわしく知れば但南無阿弥陀佛。」と締めくくられるが、このような、単信口称念仏に行き着くという立場を明確にしている点も、伝法制度を確立した聖聡らしさが現れているのではないかと思考する。

・各班進捗状況発表

〈第6回〉

日時：2019年12月16日（月）

参加者：14名

・研究発表

発表者：下端啓介（当センター学術研究員）

テーマ：科文からみる法然『往生要集釈』の構造

要旨：法然上人（一一三三—一二二、以下、全ての尊称略）の著書である『往生要集釈』は、源信（九四二—一〇一七）の『往生要集』を註釈した四積書の一つである。これまでなされてきた多くの研究では、四積書が法然の思想変遷の中どの段階に位置付けられるか、或は四積書がどのような順序で成立したかといったことに主眼が置かれてきた。『往生要集釈』には『往生要集』の科文分けを説く「合」、「広」の解釈が説かれているが、先行研究ではこれらについて具体的に論じられていないため、今回、このような科文を中心として検討した。本検討は現存の資料によって『往生要集釈』を理解し得る一つの道すじを提示することにより、四積書研究の一助になるものとする。

「合」の解釈とは、『往生要集』十門を念仏と諸行との対比でまとめ直して五門の科文とするものであり、「広」の解釈は、基本的には『往生要集』の科文をそのまま述べたものであるが、全く同じというわけではなく、法然の意図が表れた説示である。

検討の結果、『往生要集釈』において「合」・「広」・「略」・「要」の解釈は次のような関連性をもって説かれていることがわかった。まず①「合」の解釈として、要行である念仏についての章が大文第四正修念仏から第八念仏証拠までであることを定める。次いで②「広」の解釈として、「要」

の解釈で説く項目を提示するとともに、「略」の解釈を成立させるための科文を説く。次いで③「略」の解釈として、一見すると『往生要集』全体についての要行を説くかのように見える「惣結要行」という項目について、念仏を説く範囲（「合」の解釈）や「惣結諸業」と対比させないこと（「広」の解釈）により、『往生要集』の正意ではないことを説く。最後に④「要」の解釈として、『往生要集』が念仏の一行だけを勧めるということを示す。このように、『往生要集釈』は、「合」・「広」・「略」・「要」の解釈の有機的な連携によって、『往生要集』が念仏だけを勧進するということを示しているのである。

また「惣結要行B釈」について従来は後世の加筆との指摘がなされてきたが、本検討により「広」の解釈との関連性が示された。これにより、「惣結要行B釈」を含めた『往生要集釈』の意義付けがなされるべきである。

- ・各班進捗状況発表

以上